

三重大学教育学部
国際交流
ニューズレター
No. 15

国際交流ニューズレター No. 15
三重大学教育学部国際交流委員会
2012 (平成 24) 年 1 月 11 日発行

■ シンポジウム「ミス三重人形と日米交流」開催 ■

技術教育講座 教授 松岡 守

第 5 回三重大学国際交流週間 2011 の行事の一つとして 2011 年 12 月 12 日(月)にメディアホールにて標記シンポジウムを開催しました。平和を願って昭和 2 年にアメリカからいわゆる青い目の人形が日本の子どもたちに送られました。その返礼として答礼人形(市松人形)が各県から送られました。三重県ゆかりの人形が「ミス三重」で、現在はネブラスカ大学博物館に収蔵されています。三重大学とネブラスカ大学リンカーン校の大学間交流協定締結はこれがきっかけとなっています。そして伊賀市立河合小学校とリンカーン市内のプレスコット小学校との学校交流も始まっています。本



答礼人形「ミス三重」
(ネブラスカ大学博物館所蔵)

シンポジウムは答礼人形「ミス三重」の会の協力を得て、ミス三重と、ミス三重に伴う日米交流について理解を深めることを目的としました。

最初に答礼人形「ミス三重」の会の前身の「答礼人形ミス三重の里帰りを実現させる会」の幹事長である鈴木秀昭氏に同会のこれまでの経緯をご紹介いただき、続いてネブラスカ大学エグゼクティブ・ディレクターのメンデンホール氏に「ネブラスカ大学と『ミス三重』」と題して講演いただきました。そして亀山市立亀山南小学校教諭の岩脇彰先生、松阪市立小野江小学校教諭の草分京子先生に人形交流の歴史、そして人形交流の際に添えられた手紙について講演いただきました。平和を願いつつ人形に思いを込めた子どもたちの手紙に約 60 名のシンポジウム参加者全体に感動が広がりました。

続いて、日本学生支援機構のショートビジットの助成を受けて 2011 年 9 月に派遣された英語教育専修の駒井隆介さんと技術教育専修の甲斐麻純さんにミス三重が収蔵されているネブラスカ大学博物館やプレスコット小学校を訪問したことの紹介、(独)国際交流基金の海外日本語インターンシップ・プログラムの助成を受けて 2011 年秋に派遣された日本語教育コースの宮原菜月さんに同大学内での日本語のアシスト、そして滞在時の模様を紹介していただきました。

メンデンホール氏には須皆野仁志先生のデジタルストーリーテリング、そして大隈節子先生のバドミントンの授業もご覧いただきました(同氏は元々バレーボールがご専門です)。翌日には伊賀市立河合小学校を訪問し、子どもたちと交流されました。

ネブラスカ大学リンカーン校には日本の企業の支援による「川崎文庫」という日本文化を紹介する施設があります。今回の交流を含め川崎文庫の小川礼子さんにお世話になってきています。答礼人形「ミス三重」の会の方々にもお世話になりました。このように民間、学校関係者の協力を得つつ、今後も大学間だけではなく多面的な交流が展開されることが期待されます。なお、メンデンホール氏の招聘は三重大学国際交流事業経費助成によっています。



メンデンホール氏による講演

オークランド大学教育研修

「オークランド大学教育学部における教育研修」が後藤太一郎先生と荒尾浩子先生の引率のもと 2011 年 9 月 12 日(月)ー9 月 22 日(金)に実施されました。オークランド大学教育学部での授業参観、幼稚園・小中学校・高等学校の授業参観や検討会の他に、特別授業「ニュージーランドの文化」、「ニュージーランドの教育事情」を受講しました。参加学生は 9 名で、多くのことを学んで帰国しました。

■ 共に学ぶということ ■

英語教育コース 4 年 広瀬友紀

「ゆっくりと流れる時間」そう言い表すのがとてもしっくりくる、充実した穏やかな日々だった。今回の研修では、ニュージーランドの教育事情を実際の教育現場に行き行って体感することができ、改めて教育とは何か、どうあるべきなのかを考える機会をもらったように思う。

はじめに、日本の幼稚園児と同じくらいの年齢の子どもたちが通う child day care center では、幼児期の子どもたちが先生方の指導の下、ニュージーランドの大きな特徴であるマオリを初めとする多文化に自然に触れている様子に驚かされた。日本でも早期英語教育が行われている幼稚園はあるが、ここでは種類の言語や文化だけではなく、いろいろな遊びを通して多文化に親しんでいる様子がとても印象的だった。また、私のホストマザーは幼稚園の先生だったのだが、彼女の勤める幼稚園では同じ歌を英語、マオリ語、中国語、韓国語、など様々な国の言語でも歌うそうだ。幼い頃から多文化共存を当然のものとして成長していける環境にとっても魅力を感じた。

小学校を訪問した際には、教室に満ち溢れるリラックスした緩やかな空気があった。また、ニュージーランドには日本のように統一された教科書が存在しないため、班ごと(国語・算数はレベルごと)に全く別の教材を使っており、日本での一斉授業しか知らなかった私にはそれはとても新鮮な光景だった。授業中に教室の外で討論を開始する児童グループもあり、本当にのびのびとした環境で学びが行われていた。授業以外にも、「○○の日」というものを設けて、子どもたちや先生がコスプレをして生活の中で楽しみながら新しいことを学んでいこうとする姿勢が魅力的だった。

中学校・高等学校では、パソコンが一人一台学校から支給されている学校もあり、授業中は常にパソコンが机の上に開かれていた

り、私たち大学生でも圧倒されるような素晴らしいプレゼンテーションを中学生が難なくこなしていたりと、驚きの世界が広がっていた。学校の方針や生徒たちのレベルによっても異なるのかもしれないが、訪問した中学校ではパソコンを駆使して自らの成績閲覧やレコーダーに録音した自分や両親の感想付きで学習の成果をウェブページにまとめる能力などが非常に優れており、現代社会のニーズに合わせた教育を行っているという印象が強く残った。

どの校種でも先生方が口を揃えて言っていたのは、「教師は子どもと共に様々なことを学んでいく」という教師の在り方と、「掲示物や雰囲気などの教室内の環境がいかんにか学習者にとって大切か」ということだった。ニュージーランドと日本は異なる国で違う言語・文化を持っているため、一概にニュージーランドの教育をまねれば日本でもうまくいくとも限らないし、どちらの教育が優れているかということはいえないが、この2点に関しては、ぜひニュージーランドの考え方を見習いたいと心から思った。どちらかという日本では、教師とは子どもたちに様々なことを「教える者」として捉えられている場合が多いと思う。もちろん知識の上では十分にその役割は務まるのだろうが、ニュージーランドで見た児童たちの発言量の多さや、子どもたちの意見を全て拾い相槌を打ちながらホワイトボードにはりつけた紙に書きこんでいく教師の姿を見て、本当に子どもたちを尊重し、「共に学ぶ」という信念を感じた。他にも、職員室にはソファや長机などのみ設置し、様々な年齢の教員たちが気軽に話をできる空間にしていることや、morning tea timeの習慣も、ニュージーランドの教育現場において彼らの国民性を活かすことのできる素晴らしいものだと思った。ニュージーランドで実際に目にしたものを全てまねることはできなくても、素晴らしいと思った部分を胸にしっかりと留め、これから始まる教員人生に活かしていきたい。



Child day care center での幼児教育参観

3 大学国際ジョイントセミナー&シンポジウム

第18回3大学国際ジョイントセミナー&シンポジウムが江蘇大学(中国)で2011年10月26日(水) - 31日(月)に開催されました。5カ国7大学から学生・教職員合わせて約120名が参加し、学生は、人口・食料・エネルギー・環境生態学的発展・低炭素というテーマのもと英語による論文発表とポスター発表を行い、またワークショップに取り組みました。三重大からは15名の学生が参加し、教育学部からは森田松之助君が東日本大震災におけるボランティア活動について発表しました。

■ 中国でのプレゼンを終えて ■

スポーツ健康科学コース4年 森田松之助

「タダで中国行けるけど行かへん？」友だちから電話があった。僕は海外を一人旅するのが好きだったので「めっちゃええやん！行く！」と答えた。後日、先生から詳細を聞いたときに、タダで遊びに行けるほど三重大は甘くないことを知った。「英語で論文を書く？英語でプレゼンをする？俺にできるのか？」そう思った。よく考えて一度は断った。しかし、教育学部の学生だけ唯一参加していないことを知った。このとき宮地先生との出会いもあり、これも何かの縁だと思い、挑戦することを決めた。英語なんて全然しゃべれないのに。笑。でも挑戦したかった。

僕のプレゼンのテーマは「東日本大震災による被災地での活動報告」だった。実体験から活動をまとめて英訳し、それをもとにプレゼン資料を作り、練習した。英語がほんとうに苦手な僕にとってこの作業は辛かった。宮地先生のご指導もあり、なんとか完成した。

中国の江蘇大学につくと、まずは盛大なパーティーがあった。日本、中国、タイ、インドネシアの学生が酒を飲んだり、歌を歌ったり、自己紹介をしたりした。このパーティーは毎晩行われた。毎晩毎晩みんなで騒いで交流した。毎日パーティーがあったが、やらなければいけないことはしっかりやった。英語でのプレゼンだ。プレゼンの後の質問にはうまく答えられなかったが、ノリと伝えたいという気持ちでなんとか乗り切った。このとき、英語が話せないということに恥ずかしさはなかった。その場の雰囲気を楽しんでた。終わった後には何ともいえない達成感があった。

長いようで短いセミナーもおわりに近づき、最後のパーティーになったとき、多くの人が泣いていた。僕も泣いた。それだけ達成感があった。そして何より、ここで知りあった仲間と別れるのが辛かった。夜遅くまでああでもないこうでもないと言いつつワークショップや、どんちゃん騒ぎをしていたパーティー、そしてお互いのプレゼンテーションの発表。すべてが良い思い出だった。



Tri-U IJSS 2011 開会式



森田君の発表

「インドネシアにきてね!!」そう書かれた手紙をポケットにしまい、別れを惜しみながら僕たちは日本に帰ってきた。みんなありがとう。また会えるといいね。

「インドネシアにきてね!!」そう書かれた手紙をポケットにしまい、別れを惜しみながら僕たちは日本に帰ってきた。みんなありがとう。また会えるといいね。



中国服を着ての歓迎会